2025 年度 展覧会スケジュール

※予定は変更となる場合があります

2025. 4 5 6 7 8 9 10 11 12 2026 1 2 3

- 藤四郎トリエンナーレ展
- 昭和 100 年　瀬戸陶芸展
- 収蔵品展
- 瀬戸の原風景展
- 吉祥のかたち展
- 収蔵品展
- 市民が愛した北川民次展

2025/4/19(土)−6/15(日)

特別展　　休館日：5/13、6/10

せとものフェスタ 2025

第５回
瀬戸・藤四郎トリエンナーレ
ー瀬戸の原土を活かしてー

瀬戸では、陶祖800年祭の開催を契機に3年に1度、やきものづくりの原点に立ち返る機会として、“自ら土を採集し”“自ら採集した土で粘土をつくり”“自らその粘土で制作する”、同じ素材で競う公募展「瀬戸・藤四郎トリエンナーレ」を開催しており、今回で5回目を迎えます。2024年夏の原土採集を皮切りに約7カ月間、それぞれの応募者たちは原土から粘土を精製し、作品を作り上げました。本展では4名の審査員によって選ばれた入賞・入選作品を72点展示します。

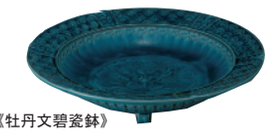
グランプリ（藤四郎賞）
内田 明美《バルス　～平和への道～》

2025/6/21(土)−8/31(日)

企画展　　休館日：7/8、8/12

昭和 100 年 瀬戸陶芸
ー産業から美術へー

明治時代以降、瀬戸では産業工芸的な図案研究がされるようになりました。大正時代に入ると意匠や図案を用いて陶磁器の芸術性を高めるという意識がより高まり、一部ではありますが創作的な陶芸という意識が瀬戸で芽生え始めるようになります。
昭和時代になるといくつもの陶芸家グループが誕生し、国の主催する展覧会への出品などを通して瀬戸の陶芸は発展していきました。
本展では、昭和を代表する陶芸家グループに所属した陶芸家たちの作品を展示し、瀬戸陶芸の興りについてご覧いただきます。



加藤華仙《牡丹文碧瓷鉢》
昭和 21 年（1946）、瀬戸市美術館蔵

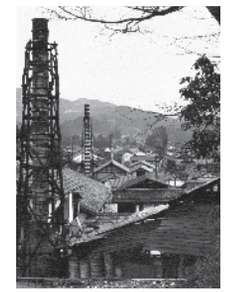
2025/9/13(土)−11/30(日)

特別企画展　　休館日：10/14、11/11

瀬戸市制施行 96 周年記念
国際芸術祭「あいち 2025」連携企画プログラム

瀬戸の原風景
ー陶都瀬戸の記憶を辿るー

瀬戸のまちは、やきものづくりの全ての工程が瀬戸の中で繰り広げられていたため、“瀬戸キャニオン”と呼ばれる陶土・珪砂採掘場、“モロ”と呼ばれる工場、林立する窯の煙突など、やきものづくりそのものがまちの風景を形づくってきました。こうした独自の風土は、芸術家たちの創作意欲をかき立て、多くの優れた作品が生み出されました。
本展では、昭和 20 から 30 年代にかけて写真家（土門拳、東松照明、臼井薫）が撮影した瀬戸を題材とする写真とともに、画家（北川民次）が描いた瀬戸の風景画を一堂にご紹介します。



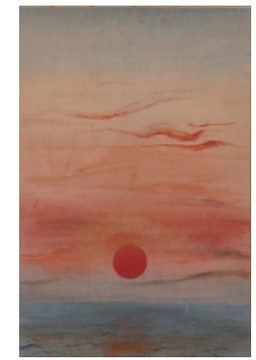
臼井薫《陶器工場の家並》瀬戸市美術館蔵

2025/12/13(土)−2026/2/1(日)

企画展　　休館日：12/28-2026/1/4、1/13

吉祥のかたち
ー藤井達吉を中心にー

藤井達吉は、本館の主な収蔵作家の一人で、美術工芸家として作品制作を行うだけではなく、各地の郷土工芸の新興に携わりました。瀬戸では若き陶芸家たちへ指導を行い、大きな影響を与えています。本展では、年の初めにふさわしいおめでたい作品、富士山や松竹梅などの縁起物を描いた作品について、当館が誇る藤井達吉の作品を中心にご紹介します。



藤井達吉《極彩色　大洋の日出》瀬戸市美術館蔵

2026/2/7(土)−4/12(日)

特別展　　休館日：2/10、3/10

生誕 130 周年

市民が愛した北川民次 Part Ⅱ

北川民次（1894-1989）は、市内にアトリエを構え、瀬戸の風景や人々を題材にした作品を多く手がけた市民から愛された画家です。本展は、令和元年に開催した第 1 弾に続き生誕130周年を迎える本年度、第2弾として開催します。市民等が所蔵する貴重な作品を一堂に展示し「民衆とともに生き、民衆の中で描いた」民次作品を紹介します。それぞれの家庭で大事に保管され、愛されてきた民次の作品をご覧いただくことで、民次が瀬戸市の宝であり誇りであることを再認識できることと思います。

《北川民次》撮影：伊里一彦氏
写真提供：フォトスタジオ伊里

瀬戸市美術館
Seto City Art Museum
〒489-0884 愛知県瀬戸市西茨町113-3
TEL 0561-84-1093　FAX 0561-85-0415
E-Mail art@city.seto.lg.jp
URL https://www.seto-cul.jp/